
雪風と無限

櫻井 G

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雪風と無限

【Nコード】

N4168L

【作者名】

櫻井G

【あらすじ】

神のミスによって死んでしまった男はチート能力をもらってゼロ魔の世界に行くことに！
初作品です
タイトル変えました

プロローグ（前書き）

神のミスによって死んでしまった男はチート能力をもらって
ゼロ魔の世界に行くことに！
初作品です

プロローグ

「うわゝゝグロ！」

自分の死体って見るものじゃないわ」

今、俺は幽霊？になって自分を見下ろしている

なぜ幽霊？かと言われれば、自分を認識できても自分の体が見えないからだ。

体を動かしてる感覚はあるのに見えないし何も起こらないし、自分に触れられない、できるのはただ見てるだけ。

最初は、混乱したが、どうにか落ち着けた、どうしてこうなったかというところ「あー・・遅かったか」

回想しようとしたら声が俺の上から聞こえた。

「どちらさん？」

声の方を見るとなんか神っぽい人がいた、いや、神、信じてないけどわ。

「君が思ったとおり神様だよ、この姿は、君のイメージだけだ。」

「イメージ？」

「そう、存在が違いすぎるからね、ムリに知覚しようとする発狂するから、

私の様な存在は、相手のイメージに任せるようにしているんだよ。」

発狂って・

「その神様が俺に何か用ですか？、それとも人が死んだら毎回こん

なふうに神様が来るんですか？」

いやいやそれは無いだろうと思いなから聞いてみる。

「いや・そのね、君は部下の手違いで死んじゃたんだよね。それに気づいてすぐに来たんだけど、

間にあわなかつたんだ。」

は・・・手違い

「えっと、つまり、あんた等のせいで俺は死んだと」

「うん」

「ふざけんな~~~~~」

俺は殴り掛かったが、なにも起こらなかった。

「わるいんだけど、とりあえずついて来て下さい、ミスした本人もいますので」

神がそう言つと俺は光に包まれた。

「~~~~~」

しばらく経つといきなり白い空間に出た

其処には二人の人物が土下座していた

「なに？」

「「すいませんでした」」

いきなり、あやまられた。

「今回、うちの息子のミスでご迷惑をおかけして申し訳ありません

でした」

「すいませんでした」

「それで、あなたには、こちらの謝罪としていくつか選んでもらうことになりました」

「ちよつとまで、謝罪すると言つのならどうしてこうなったのか、最初から説明しろ」

「す、すみません、今、説明させます。ほら、説明しろ。」

「寿命管理科の職業見学に行った時に、躓いてしまって職員にぶつかってしまったんです」

その時、あなたの寿命のデータが消えてしまって、寿命のデータが消えると、世界が存在しない物が在ると認識し排除しようとして動きだすんだそうです。

そのせいであなは・・・」

「それであんなグロい死に方になったと」

「すいません」

どつりで、躓いて車道に出て10トントラックに撥ねられて、電柱のステップが首に刺さってちぎれ、

電柱にさらし首、体は、落下して心臓の位置にポールが串刺し、・・・

「どこの吸血鬼だよ！」

ビクツとする二人

数分後

親の神が説明することになり息子の方は出て行った。

「それで、その選択って言うのは、どう言う物なの？」

「あ、はい、まず転生するかしないかです。まあ、これはあまり関係ないですね」

「なぜですか？」

「どのようなしろ、体は再構成されますから、ある意味転生ですから。次は世界の選択です。」

「せかい？」

「はい、まず生まれ変わる場合、この場合は、あるひとつの世界を除いて大まかに分けてあとはランダムです」

「ひとつの世界？」

「ああ、それは此処神の世界です」

「大まかに分けてって言ったけど・・・」

「剣や魔法、超能力の世界等ですね、あとは、記憶を消すか消さないかです」

「俺は、体とかも今までの方が嬉しいし、記憶も消したくない」

「その場合は、中世や剣と魔法の世界のような、戸籍など要らない世界になります。」

「このような世界ですと、生きていくのが難しいので能力等をいくつか差し上げます。」

「また、行く前にどこの世界かおしえます。」

「世界を聞いてから能力つて選べるのか？」

「え〜と、大丈夫ですよ」

「なら、転生しないし、記憶を消さない」

「少し待ってください、えーとあなたの世界言つところのゼロの使い魔の世界ですね」

ゼロ魔の世界か、なら

「俺の持つてるジルオールインフィニット+の主人公のデータと経験、

武器防具アイテムと、武器防具アイテムを収納するために、Fat eのギルの蔵の能力と、

アーチャーの解析とキャスターの道具作成の能力と知識と技能、

ゼロ魔の文字や言語の理解と系統魔法の才能をくれ」

「チートですな、いいでしょうその能力を付けて肉体を再構成します」

光があふれてきたら足に地面の感触伝わり体が見えるようになった。

「それではあなたを転送します。」（やばい、若返ってしまった）

「ああ、たのむ」

俺は光に包まれた瞬間強い衝撃を受けた

「ガッ」

プロローグ2

「……………タバサ……………」

「いよいよ使い魔召喚の儀式ね、ワクワクすると思わない？」

「別に……」

「無関心ねえ。生涯のパートナーを呼ぶ、言うなれば偉大なるメイジの第一歩だつて言うのに」

「なる様になる」

「まあいいわ。それよりも、私は何を呼ぶのかしら？」

「キュルケは火属性。火竜が妥当な所」

「だと良いわね。ああ、楽しみ」

今日は、トリステイン魔法学校での春の使い魔召喚の儀式。

私の親友キュルケを始めとする周りの皆は、見て取れる上機嫌。

私達生徒の輪の中心で、またメイジに仕える使い魔が呼び出される。

「そろそろあなたの番よ、タバサ」

「……そう」

彼女は彼女の系統に合ったサラマンダーを召喚したらしい。それが自分のことの様に嬉しい。

「次、ミス・タバサ！」

「ほら、あなたの番よ」

「わかってる」

しかし、自分はどんなのだろうか？偽名で『サモン・サーヴァント』

をするしか無い自分の呼び掛けにちゃんと応えてくれるのだろうか？

「どうしたのですか、ミス・タバサ？」

「・・・何でもありません」

・・・悩んでいてもしょうがない。自分は祈ることしか出来ないのだから。

「我が名はタバサ。五つの力を司るペンタゴン。我に従いし使い魔を・・・召喚せよ！」

私の前に銀色のゲートが現れる、もうすぐ私の使い魔が呼ばれて来るはずだった。

バチツバチツ

銀色のゲートに白い光が交ざった。そう交ざったのだ

使い魔が召喚される時ゲートが光ることは有っても、交ざり半分だけ光ることなど無い。

ありえないのだ。

私はもしもの為に身構えた。

そしてゲートから

「ガッ」

銀の鎧を着た男と

「キュイ〜」

風竜が跳び出して来た。

「うそ・・・使い魔が複数！」

「しかも片方は風竜、片方は平民だぞ！」

「皆さん、静かに！・・・ミス・タバサ、続けて『コントラクト・サーヴァント』を行ってください」

「ミスタ・コルベール、この場合、どちらとすればよろしいんでしょうか？」

「両方と言いたいがさっきのゲートは変だったからね、風竜の方と『コントラクト・サーヴァント』

を行って、彼の方は話しを聴いてからの方がいいだろう、さいわいどちらか片方と契約出来れば進級出来るしね。」

コルベール先生は汗を掻きながら彼から目を離さないようにしている

「なあ、此処はどこだ？」

「少し待ってて、話はそれから」

「わかった」

彼から離れて風竜に向かう

「五つの力を司るペンタゴン。この者に祝福を与え、我が使い魔となせ」

「儀式は終了。こっち」

「儀式って何？ 今のがか？」

無事、風竜と『コントラクト・サーヴァント』出来た。

私は、風竜と彼の元に行き『サイレント』を懸けて彼と話そうとした。

「こんにちは、私の名前はイルククウなのね。あなた達はなんてゆうのね？お姉さまって呼んでいい？」

「韻竜」

「ん？」

「キユイ？」

「このことは、内緒にして」

「・・・わかった。俺の名前は、ジン、タカミネ高嶺、ジン仁家名が高嶺、名前が仁。

ところでここは、どこだ？」

「私は、タバサ。ここはトリステイン魔法学院、イルククウは私達以外の人の前では喋っちゃダメ。

もちろん、魔法も厳禁。」

「どうしてなのね」

「実験材料」

「きゅい？」

「なるほど。イルククウをずーっと檻に入れて変な薬やら飲ませたり、

切り刻んだりって事しようとするかもしれないって事が」

「そう」

「きゅいっ！ いやいや！ いやなのね!!」

「だから約束」

「わかったのね。きゅいきゅい……」

仕方なくという感じで、うんうんと頷く。

……あまり可愛く見えないけど。

「それともう一つ、名前を付ける」

「名前？」

「イルククウなんて、普通人間に思いつく筈のない名。だからあなたにシルフィードという名をあたえる」

「きゅいきゅい、わかったのね。竜としての名はイルククウ、お姉様に貰った名前はシルフィード。」

わーい、私は2つも名前がある〜る〜る〜」

「お姉様？」

「そうなのね〜」

「わかった」

足になる幻獣は欲しかった。

でもまさか、風韻竜が手に入るとは思わなかった。

「きゅいきゅい、お兄様とお姉様と一緒に出来た〜

るるるる〜

」

「俺、お兄様？」

「そうなのね〜」

「はあ、わかったよ。シルフィード」

……でも煩い。

この体格ならまだ子供かもしれないが、騒がしいのは嫌い。教育が必要。

「これから魔法を解くから、喋っちゃダメ」

ドカーーンッ！と爆音が響いてきた。

――――ジン――――

ドカーーンッ！

タバサが魔法を解くと雑音と爆発音が響いて大きな声が上がった。

「ゼロのルイズも平民を召還したー！？」

サイトが召喚されたみたいだな
ルイズがコルベール先生に再召喚を頼んでいるようだ

「それはダメだ。ミス・ヴァリエール」

「どうしてですか!」

「決まりだよ。二年生に進級する際、君たちは『使い魔』を召喚する。今やっているとおりだ。

それによって現れた『使い魔』で、今後の属性を固定し、それにより専門課程へと進むんだ。

一度呼び出した『使い魔』は変更することは出来ない。何故なら春の使い魔召喚は神聖な儀式だからだ。

好む好まざるにかかわらず、君は呼び出してしまった彼を『使い魔』にするしかない」

「でも! 平民を使い魔にするなんて聞いたことがありません!、それに、ミス・タバサだって契約してないじゃないですか!」

「彼女のゲートには、異変があったし、召喚した風竜とは、契約している。

ミス・ヴァリエールのゲートに異変はなく、召喚したものは、彼一人だ。ゆえに例外は認められない」

ルイズは諦めたのかサイトと『コントラクト・サーヴァント』をしたようだ。

あ、サイトがルイズに殴られ気絶した。

「ミス・タバサ、このあと彼と一緒に学園長室に来てください。

彼にいろいろ聞きたいことや、これからの事を話し会わねばなりませんから」

「はい」

そうして俺達は学園長室にむかった・・・飛んで（笑）

プロローグ2（後書き）

なかなかうまく進まない
文才が欲しい

1話（前書き）

リアルが忙しく

文才がなく

タイピングが遅いので

更新が遅れていますが頑張りますので
よろしく願います

1話

――――ジン――――

「失礼します。」

さて、ここ（学院長室）まで来たがどうするか、てっきりルイズに召喚されると思っていたからなあ。俺のこと、どう説明しよう。う
――――ん

俺自身とジルオール的主人公の経歴を混ぜるか、うん。それがいい
「それで、君は何者で、どういう経緯で召喚されたか、教えてくれるかの」

「それは良いんですけど、人払いをしてもらえますか」

「ミス」

「わかりました」

ロングビルことマチルダが出て行く。
その間にどう話すか考えをまとめる。

「私の名前は高嶺 仁 こちらで言うとジン・リユーガ・フォン・
タカミネ・ノーブル伯

ここに来たのは、うーん、事故、ですかね。」

「伯爵のう」

「すこし長い話になりますがいいですか」

「かまわない」

「いいじゃろっ」

「どっぞ」

三人がうなづく

「まず、そうですね、私、いや俺は、この世界の人間ではありませんせん」

「どついう、意味かの」

「異世界から来ました」

「それは「質問や疑問は後でよろしいですか」ああ」

「俺は、魔法の無い世界で生まれ、ある日、気がつくつと、とある塔の中にいました」

そして、俺はジルオールの話をしていく（四週目男主人公『未来への扉』エンド）

デインガル帝国の宰相に助けられ、冒険者ギルドに入り冒険者になったこと、

その世界の文字を覚え、魔法を習得し、いろいろな、仕事をして、そこそこ有名になったところに、盗賊に囲まれた貴族を助けたら、権力争いにまきこまれ助けた公爵の腹違いの弟にされ、領地と爵位と名前を貰った事。

冒険者として『バイアシオン大陸』で有名に成り過ぎたため、別の大陸に渡る事にした事。

別の大陸へ行く為の移動魔法の実験中に事故が起きた事などを話した。

（この世界で受け入れられそうな物のみ）

「そうしてここに、竜に体当たりされて来たんだけど・・・」

「ふむ。その移動魔法の事故でミス・タバサの『サモン・サーヴァント』に

まきこまれたと考えていいようですね」

「そのようじゃな」

「・・・」

「それで、どうするんですか？」
「ふむ、そうじゃな、異世界の事と生まれが平民だと言う事を隠し、我々の知らぬ大陸の貴族と言う事にした方がいいじゃろ。」
「そうですね」
「つまり、公爵家の三男で現伯爵と？」
「いや、伯爵はなしにしてくれ、若すぎるからの」
「はあ？」

「いやいや、俺もう二十歳過ぎてるんだけど。」

「そう思ってたらトンデモナイ一言を言ってくれやがりましたヨ！」

「いや、どう見ても15〜16歳の君が伯爵とは誰も信じんじやろ」
「はあ~~~~~」

「な、なんじゃ」

俺は慌てて自分の顔をさわる
よく判らないが張りがあある？

「すみません、鏡、ありますか」

「これを」

「くぁwせdrftgyふじこlp。」

「若返ってる~~~~~」

あのクソ神、失敗しやがったな

「すみません、取乱しました」

「いや、いいんじゃないが・・・その」

「たぶん、事故のせいで、若返ったんだと思います」

「なら君は」

「22歳です7年くらい若返ったみたいですね、魔力等の能力はそ

のまま」

「そうか、じゃがこれは今回にとっては好都合じゃ」

「えっと、それは？」

「なに、君は我々の知らない国の貴族で、君の魔法とミス・タバサの魔法が偶然重なって

来てしまったから、祖国に帰れないので、このトリステイン魔法学院の特別留学生とし、

帰るめどが立つまで、この魔法学院が君の身元を引き受けるということじゃよ」

「つまり、魔法学院としては、俺を召喚した責任があり、その俺が
どういう人物か

見極めておかないと、実際にも対外的にも拙いと」

「・・・そうじゃ、それに異世界の魔法にも興味があるしのう」

「わかった。ああ、そうだった。」

「？まだ何かあるのかい」

「ああ、もう一人召喚された奴が居ただろ。荷物や格好から言って俺の同郷だ。

魔法の無い世界でのな」

「君に任せる、君が見極めて話すといい。俺達も初めてのケースで
な……まあ、

君の世界からこの世界に来る事が出来た以上、何らかの方法がある
じゃろう。雲をつかむような話じゃが、調べておいてあげよう。君
は兎も角その彼の待遇はどうにもできんしの」

「大丈夫かな？」

「生活の保障はする、あなたの世界に戻る方法もきつと見つかる」

「判った。それで、これから俺はどうすればいい」

「うむ、部屋は明日には、よいいしよう、さしあたって今夜は」

「いい」

「？」

「私と呼んだ」

「しかし、わし等にも」
「今夜は泊める」

いやいや、確かにタバサとは話したっかたけど、それはな
俺が悩んでいると

「異世界のこと興味がある」

「わかった、部屋の用意が出来るまで君に任せる」

「オールド・オスマン！」

「何じゃミスタ……ツルスベール」

「コルベールです！」

二人が言い争っている内に俺達は、部屋を出てタバサの部屋に向か
った。

ジン達は逃げ出した コルベール達はきずかない 逃げきつ
た。

1話（後書き）

話が進みません

まだ一日も経ってない

orz

2話

学院長との会合が終わり（逃げ出した）、俺はタバサの部屋へと通された。

女の子の部屋に入った事はないが、随分と本が多いな……。

まあタバサって、暇さえあればどこからともなく取り出して読んでいるから、

あまり驚けないけど。

「……ごめんなさい」

「え？」

「こんな事になってしまって」

「いや、別に……ワザとじゃないんだからいいよ。最初に異世界に飛ばされた時と違って

何も無いなんて事もないしさあ。新しい生活が始まる訳だし、頑張らないと」

「……」

気のせいかな、今うつすらと笑ったように見えた。

些細な変化を見極められる程の付き合いじゃないけど……間違いないよな？

なんて考えてると、タバサは本を閉じてクローゼットと思われるタンスへと歩を進める。

「着替える」

「あ、はいはい」

そう言って、外へ。

ドアの前に腰掛けて、とりあえず剣を眺める。

主人公いや、経験だけでなく、なぜか記憶まで有るからもう俺か。
(四週全て)

俺が、初めて買った片手剣とダブルブレードを覚えてから鍛えた片手剣、

レインとセイル二本の愛剣を眺めながらこれからの事を考える。
そして決めた。

「ちよつとあんた！」

横から大音量の怒鳴り声が響く。

見てみると、特徴的なまでにピンク色の髪のルイズだ

「なんだよ」

「ここは女子寮よ！ 何で……ん？ ああ、タバサが呼んだ平民の
使い魔ね？」

「召喚したのは確かだな。確か、ゼロのルイズ？」

「はあっ！？ 今なんて言った！！？」

分かっていたとはいえこの女、うるさすぎる

「こんな所で何してるのよ？」

「タバサが着替え中だから、外で待機しているんだよ」

「待機？ タバサってば、何で使い魔なんかに見られて恥ずかしい
なんて思っわけ？

変わってるわね」

「あの、俺一応男……」

「は？ 男？ どこに？ たかが平民の使い魔の分際で何いってる
のよ？」

馬鹿じゃないの？」

うわっ……貴族でなければ人でないってタイプか？
知ってはいたがここまでプライドが高いとあまり親しく為りたくないな。

「ちよつと平民！」

「なんでしようか、貴族様？、それと平民でもないし、使い魔でもないよ」

「今度ゼロなんて言ってみなさい？ ふっ飛ばしてやるんだからね
！！」

そう言うなり、とつとと去ってしまった。

俺の言葉は無視して。

まあそれはさておいても……

「……嫌な女。あいつに召喚されなかったのがせめてもの救いか」

そして、あいつに召喚されたサイトに同情した。

それからタバサからの許可が出たので部屋に入ると、緑の貫頭衣にナイトキャップ。

俺の常識から考えると、御就寝モードのタバサがそこに居た。かわいい。

「騒がしかつたけど、どうかした？」

「いや、ルイズって子に怒鳴られて」

「そっ」

「ところで、ゼロってどういう意味？ 言ったら怒られたんだけど
「私は『雪風』、ミスタ・コルベールは『炎蛇』という様に、

メイジには属性と縁のある二つ名がある。ルイズの二つ名であるゼロは、

魔法成功率ゼロから付けられた不名誉な二つ名」

……まあ、俺には関係ないよな。
正直、俺を呼んだのがタバサで良かったと、其処だけは心の底から神に感謝した位だし。
少し情報を聞いて俺の記憶と照らし合わせてから、決めたことを言おう

「でも、魔法を使えるのが貴族なんだろう？ 何でゼロなんて呼ばれる奴が

この学院の生徒なんだ？」

「発動はしてるけど、爆発という結果に陥っているだけ」

「やっぱりか」

「どういう意味？」

「うん、まだ話してない事があってね。これも事故の副作用なのかな？」

俺のいないこの世界の未来が少し見えた。実際にそうなるかは、分からないけど、

変えようと思ってる。だから今度ガリア？に帰るときは俺も連れてって欲しいんだ。

俺なら、治せるかもしれないから」

「今の話は本当？」

「本当だ。やっぱり信じられないか？」

「本当に治せるの」

「それは、わからない。でも可能性は高いと思うぞ、バイアシオン大陸では

ここと違って亜人と交流があるから、術や薬の効力が高いからな。

まあ詳しい話は明日話すよ」

「わかった。……そろそろ眠る時間」

「そうなのか？ えっと……ところで、俺ってどこで寝れば良い？」

タバサはベッドを指さした。

……この部屋で、ただ1つの。

「それは？」

「ベッド」

「いや、それは見ればわかる。俺が言いたいののは、見た所この部屋で唯一のベッドを、

何故指さしてるのかを聞きたいのですが？」

「一緒に寝る」

ああなるほど、そう言う事か。

それなら納得……しっちゃダメだろ！！

「あの……一応言っておきますけど、俺男ですよ？」

「これでも武術の心得はある」

「俺もあるから……外で寝ます」

「変な事をする気？」

「いや、世話になる人に失礼な事は……」

「なら問題はない。それに、1人で寝るより一緒に寝る方がいい」

……俺の感覚はおかしいのか？

いや、着替えは注意されたから、それも変か。

……まあ、良いつて言ってるんだから良いんだよな？

「……朝も早い。そろそろ眠る」

「そうだな。お休み」

2話（後書き）

やっと一日目が終わりました。

3話

「うーん。ん、朝か、」

「くうっ……くうっ……」

俺に抱きついたまま寝付いてるタバサの重みが、現実を感じさせる……まあ、昨日ちゃん説明すると言った訳だし、六時位かな？、そろそろ起こすか。

「おーいタバサー、朝ですよー！」

「ん……」

眼をこすり、ゆっくりと起き上がるタバサ。

近くに置いてあったメガネを取り、「はい」と声をかけ手渡す。俺の姿を確認すると、俺に抱きついて肩に顔を埋めた。

母親を俺が治せるかもしれないと言ったからって、懐き過ぎだろうと思う。

さらに首を傾げるタバサ　かなり可愛い　いかんいかん！

かなりクラッと来た　やばいかも

「……よかった、夢じゃなかった」

「おはようタバサ」

「……おはよう、ジン」

とりあえず起き上がったって、空間から服を出し羽織る。

着替えると言われたので、部屋を出る

一応大まかな場所は教えて貰ったので、井戸に辿りつくとりあえず1汲みして、

自身の顔を洗ってうがい。

「ふうっ……さてと」

振り向いてみると、そこには黒髪に何やら日本人っぽい顔立ちの
々に可愛い、

シエスタと思われるメイド服の女の子が通り過ぎて行った。

その後、タバサの部屋に戻る。

「あら？あなたたしか」

タバサの親友ことキュルケが現れた。

「俺はジン、ジン・リユーガ・フォン・タカミネ・ノーブル。ジン
でいい

こう見えも貴族だ。よろしく頼む」

「そう、私はキュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハ
ルツ・ツエルプストーよ。キュルケでいいわ」

タバサの親友ことキュルケが現れた。

「ここは、女子寮なんだけど貴方はどうしてここに居るのかしら」

「タバサが俺を召喚した事で、責任があると言いついてね。」

俺の部屋が用意されるまで泊めてくれるんだとさ」

「そおなの、じゃあまたね　いくわよフレイム」

その後キュルケと別れて、ノックして部屋に入る。

タバサは身支度を終えたらしく、こちらを見ている

「これからどうする？」

「食事」

「話は？」

「授業の後」

「わかった」

寮から出て、アルヴィーズの食堂に向かう途中、光の男と、出会った（ウルルン風）

「おはようミスタ・ジン ミス・タバサ」

「「おはようございます」」

「ミスタ・ジン。悪いんですが、此方の不手際で食事の手配が間に合いませんでした。」

それで、厨房の賄いになってしまったのですがよろしいでしょうか」

「別に構いませんよ朝から油っぽいものを食べたくないですし

それに、騒がしいのは、苦手ですから」

「ならば厨房に案内します付いて来てください」

「タバサ、またな」

「ん」

タバサが頷くと俺はコルベールに付いて厨房に向かった。

「ここですよ。あ、君。マルトーコック長を呼んできてくれるかい」

「マルトーさんですね。わかりました」

「マルトーコック長に話は通してあります。朝食が終わったらここで待っていてください。」

私は君の部屋の鍵を持ってきますから。授業は制服用のマントと教科書等を、

取り寄せてからになります。では、後ほど」

そういつてコルベール先生は出でいった。

「あつしがこの厨房を預かるマルトーでさ、貴族様。しかし本当にあつし達が食う

賄いでよろしいんですかい？」

「いいですよ、マルトーさん、朝はサツパリした物の方がいいですし、それに貴族の食事は

肩こるから特にね、俺はジン、ジン・リユーガ・フォン・タカミネ・ノーブル。

ジンでいいですよ、これから暫くお世話になりますのでよろしくお願ひします」

「あ、ああ、よろしくおねがいしやす」

マルトーさんは、なにか在り得ないものを見たような表情でこちらを見ていた

つて、そうか。ここの貴族じゃ平民に礼儀を尽くすことなんて無いから……

驚きながらも俺に朝食を出してくれた。

美味かった……ただご飯が欲しかった

米ってここには無いのかな？

「ごちそうさま、美味しかったですよ」

暫らく経ってコルベル先生が戻ってきた。

俺の部屋に案内をされると言われたので、その前にタバサに伝えてから行きたいと言ったら

許可が出たのでタバサを探したらメイドに使い魔の所に向かったと聞いたので

そちらに俺達は、向かった。

3話（後書き）

リアルが忙しくて
なかなか投稿できませんが
これからも投稿していきます

ステータス

F a t e 風ステータス

（ジン・リユウガ・フォン・タカミネ・ノーブル）
『転移直後』

【ステータス】

筋力	B +	魔力	B
耐久	B +	幸運	A
敏捷	B +	宝具	E X

【スキル】

・心眼（真） A . . . 死線を潜り抜けてきたことによる、ほぼ直感の如き戦闘思考。

その眼は、数十手先の行動も予測する。

・戦闘続行 A . . . 往生際が悪い。瀕死の傷でも戦闘を可能とし、決定的な致命傷を受けない限り生き延びる。

・仕切り直し C . . . 戦闘から離脱する能力。また、不利になった先頭を戦闘開始ターンに戻し、技の条件を初期値に戻す。

・道具作成 A . . . 魔力を帯びた器具を作成できる。擬似的ながらも不死の薬さえ作り上げられる。

・無限の成長 E X . . . 無限のソウルで成長限界まで行っていたが、神のミスにより、

ステータスは、そのままレベルが1になってしまい、成長限界が無くなり、無限に成長する。

・宗和の心得 B . . . 同じ相手に同じ技を何度使用しても命中精度が下がらない特殊な技能。攻撃が見切られなくなる。

・勇猛 A + . . . 威圧・混乱・幻惑といった精神干渉を無効化する

る能力。

・バイアシオンスペル A++・・・バイアシオン大陸の魔法の全てが使えるうえに
魔法の改造までできる。

・系統魔法 F(B+)・・・まだ憶えていないが適正はある(杖と契約し、ルーンさえ憶えれば、虚無を除く四系統のトライアングルになる)

【宝具】

ゲイト・オブ・バビロン

・王の財宝・・・黄金の都へ繋がる鍵剣。空間を繋げ、宝物庫の中にある道具を自由に取り出せるようになる。(ジルオールインフイニット+のアイテムはいくら使っても減らない)ただし、ジンは宝具が入っているのを知らないため
暫くはただの倉庫として使われる。

ランク E(A++) 種別 対人宝具 レンジ -

・インフイニティット・・・HP、MPを消費し、敵全体を光の柱に包み込む

ランク A+ 種別 対軍宝具 レンジ 2~50 最大捕捉 300人

・トゥルーダーク・・・HP、MPを消費し、敵全体を壊滅

ランク A++ 種別 対城宝具 レンジ 1~99 最大捕捉 1000人

ちなみにサイト

【ステータス】

筋力 F(E+) 魔力 -

耐久 E-(D) 幸運 C

敏捷 F+(D+) 宝具 -

【スキル】

- ・ガンダールヴ C・・・武器を手に持つことでパラメーターをリンクアップさせる、また、手に持った武器の使い方が分かる。
 - ・肉体改造 D・・・召喚によって肉体の耐久力上がっている
 - ・精神改造 D・・・召喚によってハルケギニアの言葉が理解できるように成っており、
- ハルケギニアの文字の習得がしやすくなっている。副作用として主人への好感や愛情を
- 抱きやすく、敵愾心を抱かない様になっており、主人と同じ様な性格へ徐々に変わっていく。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4168/>

雪風と無限

2011年9月19日19時27分発行